



ゆくへも知らぬ

今回の百人一首はNo41～60。恋の歌が多く、しかも有名人の歌が多い。まずは、私の好きな歌から。

○由良のとを渡る舟人梶を絶え

ゆくへも知らぬ恋の路かな(曾禰 好忠)

いい歌でしょう？ 上の句全体が、鮮明な視覚のイメージをたたえながら、「ゆくへも知らぬ」の序となっている。同時に、「ゆら」という音が持つ揺らめく感じが、恋情の揺れを伝えて余情に富むといえよう。「ゆくへ」の「ゆ」との繰り返しも絶妙である。

*

さて、作者を覚えることは要求していないので、あまり注目していなかったかも知れないが、今回の範囲には親子が二組登場する。先ず一組目。

○あらざらむこの世のほかの思ひ出に

いま一度の逢ふこともがな(和泉式部)

○大江山生野の道の遠ければ

まだふみもみず天の橋立(小式部内侍)

母の和泉式部は、華やかな男性遍歴でも知られる情熱の歌人で、敦道親王との恋を記した『和泉式部日記』も有名。死ぬ前にもう一度逢いたいというこの歌も、なかなかロマンチックである。小式部内侍はその娘。歌合の歌人に選ばれた内侍に、「お前は、母の和泉式部に歌を手伝ってもらっているのだろう。天の橋立にいる母上から、相談の返事は来たか？」とからかってきた相手に対して、掛詞で地名を巧みに詠み込んだこの歌で応酬したという説話が残っている。

二組目は、

○めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に

雲隠れにし夜半の月かな(紫式部)

○有馬山猪名の笹原風吹けば

いでそよ人を忘れやはする(大式三位)

紫式部は言わずと知れた『源氏物語』の作者である。歌は、久しぶりに出会った幼なじみの友達と、十分に語り合う時間も無く分かれてしまった残念さを詠んだもの。友を月にたとえ、「雲隠れ」は月の縁語である。

娘の大式三位の歌はちょっと難解で、上の句を下の句を導く「序」と見る説と、そこにも意味を読み取る説があるほか、「いで」の部分にも肯定・否定の解がある。しかし、要は「(あなたと違って)私はあなたのことは忘れない」ということである。

さて、有名人としては、清少納言のお父さん清原元輔の歌もこの範囲に含まれる。

○契りきなかたみに袖をしぼりつつ

末の松山波超さじとは

(清少納言の歌はNo62「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」)

「末の松山」は陸奥国の歌枕で、どんなに大波も打ち寄せないという伝承があった。

*

恋に歌としては、『蜻蛉日記』の作者でもあり、本朝三美人の一人にも数えられる藤原道綱の母の歌。

○嘆きつつひとり寝る夜の明るるまは

いかに久しきものとかは知る

あと、学問・和歌・管絃など、あらゆる面で才人として誉れ高かった藤原公任の歌。

○滝の音は絶えて久しくなりぬれど

名こそ流れてなほ聞こえけれ

がある。公任の歌は、前半の「た」、後半の「な」の繰り返しがイイ雰囲気である。